

書評

楊 小敏著

『蔡京、蔡卞与北宋晚期政局研究』

横山 博俊

本書は、蔡京（1047～1126）と蔡卞（1058～1117）の兄弟に注目し、彼らが活躍した神宗期から徽宗期の政治について論じたものである。著者の楊小敏氏は、中国の首都師範大学歴史系で李華瑞氏に師事し、2006年に博士の学位を取得しており、本書はその際に提出した博士論文に基づいたものである。本書は緒論を含め十章で構成される。紙幅の都合上、構成を一覧として提示せず、内容紹介の際に各章の題目を確認することにした。

さて、緒論における著者の整理によれば、本書で問われる中心的な命題は、神宗期の王安石新法とそれにより生じた政治的・経済的・社会的な変動下における、蔡京と蔡卞の活動である。さらに分析に当たっては、彼らの意図や人間関係、当時の政治や政策がいかに相互に影響を与え合ったのかが重視される。著者は本書でこれらを「関係」と呼ぶが、こうした分析視角の背景には、近年の中国におけるネットワーク（人物間の関係や事件相互の関係、制度史における形式と実態の関係、それらの裏側に潜む利害関係など）分析を重視する研究潮流がある¹⁾。

以上の命題を基に、本書の一章から四章では、神宗期から徽宗期にかけての政争や政治課題について、蔡京と蔡卞の見解や活動と、それらに対して果たした彼らの人脈の機能が検討される。次いで五章から八章では蔡京が実施した政策について、その目的や社会への影響が検討され、最後の九章では彼らの思想や人脈、士風の変化などそれらを成り立たせているバックボーンが分析される。以下、各章の内容を簡単に紹介する。

一章「蔡氏兄弟早期的生平事迹与家族」では、まず蔡京と蔡卞の人脈のうち、血縁、姻戚関係が整理される。特に血縁関係に関しては両者の親戚に当たる蔡襄や蔡確の家族も視野に入れている。次いで熙寧（1068～1077）・元豊（1078～1085）・元祐（1086～1094）年間における両者の活動を、王安石との関係や旧法党の批判などに基づき検討する。神宗は蔡京の実務能力を評価し、王安石も同様に彼の能力を評価していた。しかし、王安石は元豊年間に宰相を退いた頃より蔡京を否定的に評価するようになったという。一方の蔡卞は神宗から学識を評価され、姻戚関係にあった王安石とは親子のような親密な関

係を保ったことを明らかにする。この点については後にも触れるが、王安石が蔡卞に送った詩を用い、そこに込められた感情の解釈を通じて実証を試みている点には注目すべきであろう。

二章「紹聖、元符時期蔡卞的政治活動」では、哲宗親政期に当たる紹聖（1094～1098）・元符（1098～1100）年間に、執政であった蔡卞の活動について、旧法党排斥への関与を軸に検討する。また新法党政権の領袖であった章惇や曾布との対立を、新法や対外政策などの問題から論じる。

三章「蔡京上台及崇寧、大觀時期的政事与人事」は、紹聖から徽宗期の崇寧・大觀年間までの蔡京の活動について、蔡京の人脈、政争、重要政策への関与、徽宗との関係を軸に考察する。紹聖・元符年間は、蔡京が旧法党の排斥や新法の復活に携わり、姻戚や推薦関係など各種の人脈を駆使して地位を確立してゆく状況を描く。徽宗即位直後に当たる、建中靖国元年（1101）の新法党と旧法党の融和政権期では、政敵の章惇や曾布との政争を概観し、続く崇寧（1102～1106）・大觀（1107～1110）年間の動向を当時の政局と対外関係から整理する。徽宗と蔡京の関係については、文化面では親密であったが、星変を理由に罷免するなど政治面では蔡京の専制を警戒していたと指摘する。しかしこれについては、藤本猛氏が対外政策における両者の意見の不一致を指摘しており²⁾、これに著者が言及していないのは問題であろう。

四章「政和、宣和年間的蔡京」は、前章と同様の手法を用いて政和（1111～1118）・宣和（1119～1125）年間の蔡京の動向を考察する。蔡京は崇寧五年と大觀三年に罷免され、その度に協力者の支援を得て宰相に返り咲いた。その中の重要人物である童貫、鄭居中、王黼との関係が整理される。重要政策では金との同盟と官制改革を扱う。まず、金との同盟については、最大の推進者であった童貫と、消極的立場から積極的な推進に転じた徽宗の側から整理する。また、同盟に消極的な蔡京が、政策決定に参与した理由について、徽宗や童貫との関係を軸に検討する。次に官制改革については、その目的を「員多闕少」（ポストに対して官僚数が多い現象）問題、官僚層との関係、専権維持の側面から検討する。また、冗官問題の悪化や宦官勢力の伸張などの負の側面も指摘する。

五章「蔡京的經濟改革」は蔡京の經濟政策を、茶、塩、酒の専売制度や貨幣政策の改革から考察する。著者は、専売に関わる種々の統制、流通ルートの整備、当十錢³⁾の鑄造など、諸政策の沿革と内容について概観し、特に諸政策の目的と社会に与えた影響に重点を置く。専売改革及び貨幣政策の共通の目的について、中央が地方財政を統制し、それによる中央の財政収入の増額にあったとする。著者は以上の問題を、徽宗以前の財政面の中央集権化や、皇帝権力強化の流れの延長線上に位置づける。

他方、地方財政の窮乏、商人や民間が被った不利益などの弊害も指摘する。

六章「蔡京の学校、科举制度」は、蔡京の科举、学校に対する改革を扱う。著者は、崇寧年間の政策を州県学の全国的な設置、太学三舍法の実施などのハード面と、経書の解釈のための学説として王安石の『字説』や『三経新義』が採用され、王安石の新学が盛況になったソフト面を概観する。次いで入学者数の増加や規模の拡大により太学の運営経費が増大し、宣和年間の廃止に至る経緯を描く。著者は改革の評価について、教育水準の向上や地方における教育重視という風潮を生じさせた肯定的側面と思想統制など否定的側面を残したとする評価を提示している⁴⁾。

七章「蔡京的社会救助政策」では、徽宗期の重要な社会的救済政策について、居養院（身寄りのない貧民救済）、安济坊（病人支援）、漏澤園（身寄りのない死者の埋葬）に注目する。著者はこれらを北宋の救荒政策の中でも最高峰であったと評価し、徽宗と蔡京による盛世を作り上げる運動として位置づける。しかし国家や民間の経済力を省みず、過度の消費を強いた点も指摘している。

八章「蔡京倡導「豊亨豫大」与北宋晚期的腐敗政治」では、蔡京の政策や政治手法のうち、政治腐敗を招いたとされるものが検討される。延福宮の建設に代表される君臣間の奢侈、道教、冗官問題と売官による政治腐敗、皇帝権力拡大のために徽宗が用いた御筆手詔⁵⁾が、蔡京の専権拡大にも寄与したとする点、台諫官のポストの独占、公田所の設置や花石綱による百姓からの収奪、軍政の腐敗、など本章で扱われる問題は他の章と比べ群を抜いて多岐に亘っている。中でも、徽宗が信奉した道教に関する議論が重視されている。著者は道士の人脈を、徽宗や宦官、官僚との関係から検討する。また、道教を含む宗教政策について、道教振興策と仏教に対する弾圧の側面から整理する。これらの政策の影響により、土木事業による民力の消耗、仏教と道教間の対立、権力の中樞部における内部対立が生じたという。

九章の「総論」では、蔡京と蔡卞の総合的な評価を人物論も交えて展開し、彼らが活動した時期の政治的社会的背景として、土風の変化について考察する。まず著者は蔡京と蔡卞の性格の差異や両者の関係、私的または政治的な人脈について整理する。次に彼らの総合評価については、政治面で政敵を朋党と指弾して排除する当時の風潮を利用して地位を確立した人物であり、経済面では土地所有者層の利害を代表し、収奪を行った人物として、教育面では儒学の現実社会への応用を方針とした王安石の思想を踏襲した人物であったとする。ただしこれは蔡京に対するものであり、実際には蔡卞の評価がほとんど無い点は問題であろう。最後に神宗期以降、土風が次第に「敗壞」していく様子を、獮官運動を好む「好官」、

「好人」の語を軸に、南宋期へと続く皇帝権力の強化の問題をも視野に入れて検討する。

本書の特筆すべき点は、蔡京と蔡卞が持つ人脈を復元し、それらが両者の政治活動に与えた影響を、豊富な事例をもとに明らかにしていることにある。これまで彼らが活躍した時代を研究する際の先行研究としては、林大介氏や羅家祥氏の論著が引用されてきた⁶⁾。しかし、本書は両氏の論著に見られない事例を紹介するなどより詳細に論じており、これらに優先して参照すべき成果と言える。次に史料の問題について、本書は人物間の関係の分析に詩などの文学史料を使用し、さらに徽宗と蔡京の関係の検討では、本来ならば美術史研究で使用される史料も駆使している。こうした史料は歴史学では従来あまり注目されておらず、今後政治史研究にはこのように多方面にわたる史料の博搜が求められる⁷⁾。

最後に問題点について述べる。既に述べた通り、本書は全編にわたり、蔡京と蔡卞兄弟に関する政治、政策、社会関係上の諸問題を取り上げているが、中でも八章は最も多くの問題について議論が展開されている。しかし、そのせいか概説的な議論に終始し、先行研究の把握も甘い部分が見られるなど、全体的に粗さが目立つ。著者は他の章では中国、台湾、日本、欧米の研究を満遍なく参照しているだけに惜しまれる。また、八章で取り上げた諸問題を「腐敗政治」と否定的に評価し、整理していることも大きな問題であろう。確かにそうした側面があったことも否定できないが、むしろ肯定的な観点からの検討が近年の主流であり、「腐敗政治」という視角だけでは従来の研究の焼き直しに過ぎない。

とはいえ、哲宗期と徽宗期にかけての政治動向や蔡京と蔡卞の政治集団、あるいは彼らのバックボーンを把握する上で有用なことに変わりはなく、本書は当該時代の政治を研究する際の必読の書と言えよう。

注

1. こうした取り組みは既に日本において、宋代史研究会編『宋代社会のネットワーク』（汲古書院、1998年）にて行われており、中国社会をネットワーク論から分析する重要性が指摘されている。また近年の欧米では、ハーバード大学が開発しているCBDB（中国歴代人物伝記資料庫）を駆使した分析も進展している。
2. 藤本猛「崇寧五年正月の政変——対遼交渉をめぐる徽宗と蔡京の対立」（『史林』92-6, 2009年）。
3. 額面表示が通常の銅銭の十倍である十文銭の貨幣。素材価値と額面表示が釣り合わないが、銅銭の鑄造コストが増大したため実施された。
4. この分野で最も大きな仕事をしたのは近藤一成氏（『宋代中国科举社会の研究』汲古書院、2009年）である。この科举や教育という問題は仁宗期の慶暦年間（1041～1048）の改革の問題とつなげて捉える視点が必要となろう。
5. 皇帝直筆を建前とした詔の一種。通常の政策決定過程では上奏や対（皇帝と直接対面して政治上の意見を陳述する）という皇帝と臣下の直接的なやりとりと、その後の中書門下など官僚機構中

枢での審議を経て案件が実施される。これに対し、御筆手詔はこのような手続きを経ずに皇帝から官府へ直接この文書を下し、案件を実施させる。御筆手詔の問題を論じたものとしては徳永洋介「宋代の御筆手詔」(『東洋史研究』57-3, 1998年)を参照。

6. 林大介「蔡京とその政治集団——宋代の皇帝・宰相関係理解のための一考察——」(『史朋』35, 2003年)。及び羅家祥『朋党之争与北宋政治』(華中師範大学出版社, 2002年)。
7. 例えば, Patricia Buckley Ebrey and Maggie Bickford ed. *Emperor Huizong and Late Northern Song China: The Politics of Culture and the Culture of Politics* (Harvard University

Press Cambridge and London, 2006.) に収録されている諸論考など、欧米における徽宗期の研究では、文化史的手法や、政治活動における共通した価値観、期待、規範を当時の人々の言説や儀礼などから捉える政治文化論的視点が導入され、従来注目されてこなかった史料にも目が向けられつつある。近年の日本においては、久保田和男「北宋徽宗時代と首都開封」(初出2005年, 同著『宋代開封の研究』汲古書院, 2005年に再録)や伊原弘編『「清明上河図」と徽宗の時代——そして輝きの残照』(勉誠出版, 2012年)に収録されている諸論考が主要な成果である。